

“いのち”にかかわる大学生の意識 に関する研究

瀬戸 進

I 緒 言

最近における医学の進歩による過剰なまでの延命操作の技術的向上とともに、我が国の高齢化のスピードは世界第1位である。65歳以上の人口が7%から14%に到達するのに、欧米諸国は50年から100年を要したのに、日本は24年間で達成し、'95には14.5%となった⁽¹⁾。

高齢化の背後にはターミナルケアと共に、人々の死に場所が家庭死から病院死へ移り、家庭死への医療援助システムが社会的な課題となってきた。なお、平均寿命はまた更新し、世界第1位('94男76.57歳、女82.98歳)になって久しい⁽²⁾。

しかも、'95年4月には名古屋市で4年に1回開催される現代医学の総括的大会(第24回日本医学会総会)で、「人間性の医学と医療～生命の世紀をひらく～」をメインテーマに臓器移植、体外受精、遺伝子操作などの神の分野が人間の手で可能になった。その中で21世紀の医療はどうあるべきかを総合的に問うた⁽³⁾。

養老氏は、我が国は公教育では宗教と哲学を教えない。梅原猛氏(1995)は「近代社会は宗教を失うことによって道德を失い、人間がまさに知的な野獣になったというドフトエフスキーの警告は正しい⁽⁴⁾」と指摘している。また、射場ら(1993)は学校教育の場を「死の日常性が喪失された社会⁽⁵⁾」であるとし、死の教育をするときは、性教育と同様に有害論があることを警告している⁽⁶⁾。井形昭弘氏(1992)は「生とは何か、死とは何か、死をみつめてこそ初めて充実した生を送る必要がある⁽⁷⁾」と第38回日本学校保健学会特別講演の中で強調している。

今ほど、学校教育で「Death Education」(アルホンス・デーケン：A.

Deeken は死の準備教育と訳している) 或は「生と死の教育」への注目がされているときはない。⁽⁸⁾これらの動静は学会の発表演題名や同類の演題数が時宣性を表わすといわれている。日本学校保健学会及び学校保健研究誌でみ限りは第34回大会(1987)までは殆どみ当らなかった。第35回大会(1988)で初めて藤田ら研究グループの「死に関する経験・態度・認識の調査研究及び子供の死生観に関する研究」がみられ、アメリカの公教育の史的発展過程を軸とした研究である。木村らの「死の教育のあり方について～小学校5・6年生を対象にして～」などの4編であった。以来、毎年数編づつ報告されるようになってはほぼ10年を経過しようとしている。

森(1994)は現在の健康教育の中で健康と対比できる「病」や「老い」及び「死」を忌避し、タブー視してきた、⁽⁸⁾としている。

栗山(1995)はかつては「性」に関することを教壇で口にすることはタブーであった。性教育の授業の中で「誕生」があれば「死」もあり、その死を教室で一緒に考えるという授業にまで一步進められないだろうか。それとも、学校の授業の中で「死」を語ることはタブーなのでしょうか?⁽⁹⁾と指摘している。

以上のことは学校教育をベースで述べてきた。大人達は日常生活の中で生死に関わる厳粛な場面でのマナーを、次代を背負う子どもたちに伝える努力を怠ってきたように思う。少産少子で病院出産、病院死の増大の状況の中で、限られた機会しかないであろうが、積極的に家族の出産や臨終に同席させるという、生きた実体験こそが望まれる。

アメリカでは、1960年代に「死の認識(Death Awareness)」という「死」を見直す運動が起っている。その運動の背景には高度に発達した医療技術がもたらす過剰な延命操作の問題があり、ベトナム戦争や高齢化社会到来が投げかけた生き方の問題を通して、アメリカ人が死生観の間直しに迫られるようになったからである。なお、死の研究は、「死の学問」タナトロジー(Thanatology)といわれる。1976年には小・中学校の子どもたちに「Death Education」が行われるようになった。同年、関連する学会も設立されている(筑波大学修士論文、福川敏機)。現在、アメリカでは高揚期(1970年代後半から1980年代初期)を経て「Death Education」の見直しが⁽⁸⁾行われている。

従来より独自に考案した質問紙法によって、児童・生徒・学生等の栄養摂

⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾ 取や食生活と自覚症状, ⁽¹²⁾ 基本的生活習慣と不定愁訴や不定愁訴の変動性など
 について追跡的に検討してきた。さらに, ⁽¹³⁾ いのちに関わる意識や生命倫理に
⁽¹⁴⁾ ⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾ 関わる項目, ⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾ オールポートの人生観などの年齢的・年次的推移などについて
⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾ ⁽²¹⁾ も系統的に報告してきた。

今回は大学生について, いのちに関わる意識やその項目を知った時期・情報源及び数量化Ⅲ類による項目間の交絡性, オールポートの人生観などについてみた。

これを'90年はOT大では大学カリキュラムの旧課程の最終グループのⅠ, Ⅱ回生とした。宗門立系OT大と一般系KS大とで, 大学間の特性をみようとした。'93年はOT大のカリキュラム大綱化('92)による新課程2年目のⅠ, Ⅱ回生として, OT大の旧課程と新課程の年次的特性をみようとしたのでその一部を報告する。

Ⅱ 方 法

1. 調査時期・対象; '90年10月初旬, 両大学共に必修保健体育科目(実技・講義)受講者で4年制課程Ⅰ～Ⅱ回生である。宗門立系OT大は文学部で, 男子236名, 女子196名。一般系大学KS大は文学部・経済学部混合で, 男子198名, 女子178名である。

'93年10月初旬, 宗門立系OT大は大学カリキュラム大綱化後2年目で自由科目としての保健体育科目(実技・講義)受講の文学部(4年制課程)及び短期大学部(2年制課程)のⅠ～Ⅱ回生の混合である。男子403名, 女子578名である。

2. アンケート調査は有記項目式, 無記名式を基本(学生番号記入)とした。

1)いのちに関わる意識項目は独自に考案した基本的な目的的事項に集約して14項目(図1, 2)とし, 短時間に応答できるようにし, 「はい」, 「いいえ」のどちらか一つに○印をつけさせた。なお, 図2の「3及び5の項目」は3つの設問中より1つとし, 「6の項目」は「その他」を含めて6つの設問中より1つを選択させ, いずれも複数回答ではない。一部の項目については簡略な説明をし, 質問には自由に応答した。

2)いのちに関わる事柄をいつ, 何によって知ったかの時期と情報源については, 先の14項目の中の7～14番目の8項目(図7, 8)とした。

4 (瀬戸)

3. オールポートの人生観6項目(表1)のうち該当するもの一つに○印をつけさせた。

以上の2と3を1枚のアンケート用紙とした。

4. 数量化Ⅲ類による主成分分析から項目間の関連性をみた。項目はいのちに関わる意識項目14項目の中から、死の不安、信仰、楽園、妊娠、がん告知、臓器移植、安楽死、ホスピスの8項目とした。F1軸をX軸に採り、F2軸をY軸に採って、主成分分析の結果から各項目を二次元布置した。項目間の関連性から類推的に意味解釈する基本として、F1軸に近く寄っている項目は量的内容としての関連性が強く(例えば、①項目と②項目間の同時回答人数の百分比から類推する)、F2軸に近く寄っている項目は質的・種類の内容として、それぞれに類推して意味解釈して因子名などをつけた。量的関連性は項目間の同時解答率から解釈した。

Ⅲ 結 果

1. いのちに関わる意識(はい)の比較

図1及び図2の各項目別3本のヒストグラムは、上から一般系大学の'90年KS大、中央及び一番下は宗門立系の'90年OT大と'93年OT大であり、左側が男子、右側が女子で、図中の数字は百分比を示す。

調査学生は先の方法でも述べたが、保健体育科受講者であるが、'90年は両大学共に必修科目であった。しかし、'93年OT大学生は'92年に文部省の大学カリキュラム大綱化改正に伴う保健体育科目が自由科目になって2年目の学生である。

図1の11項目は設問に対して「はい」または「いいえ」のどちらかとした。図2の「3及び5の項目」は3つの設問の中から1つを選択させた。「6の項目」は「その他」を含めた6つの設問の中から1つを選択させ、いずれも複数回答ではない。なお、図中には「いいえ、その他、無回答」は省略した。

1) OT大の年次別男女間の比較

図1についてみると、1. 死について不安を感じずる者は'90年では男子52.1%の過半数に対し女子63.3%で、女子が有意($P<0.05$)に大であった。'93年になると男子は60.8%と有意に増大($P<0.05$)し、女子は60.6%とやや減少するが男女間ではほぼ同じ水準となった。

2. 信仰を持つ者は'90年では男子28.9%に対し女子は男子の半数の

14.3%で、男女間には顕著な有意差 ($P<0.001$) がみられた。'93年では男子26.6%、女子12.6%と両者共に'90年よりもやや減少傾向がみられたが、男女間の顕著な有意差 ($P<0.001$) に変りはなかった。

4. 将来望まない妊娠でも出産する者は'90年では男子29.7%、女子34.7%で女子は男子よりも5%高かったが、男女ほぼ3分の1が肯定的であった。'93年になると男子は43.7%と'90年よりも14%と著しく有意 ($P<0.001$) に増大し、女子も男子と同様に47.2%と前回よりも12.5%と有意 ($P<0.01$) に増大したことが特徴的であった。

7. 人工授精による出産に賛成する者は'93年では男子は半数の51.1%であったが、女子は62.8%で男子よりも11.7%とかなり高く、顕著な有意差 ($P<0.001$) が認められた。

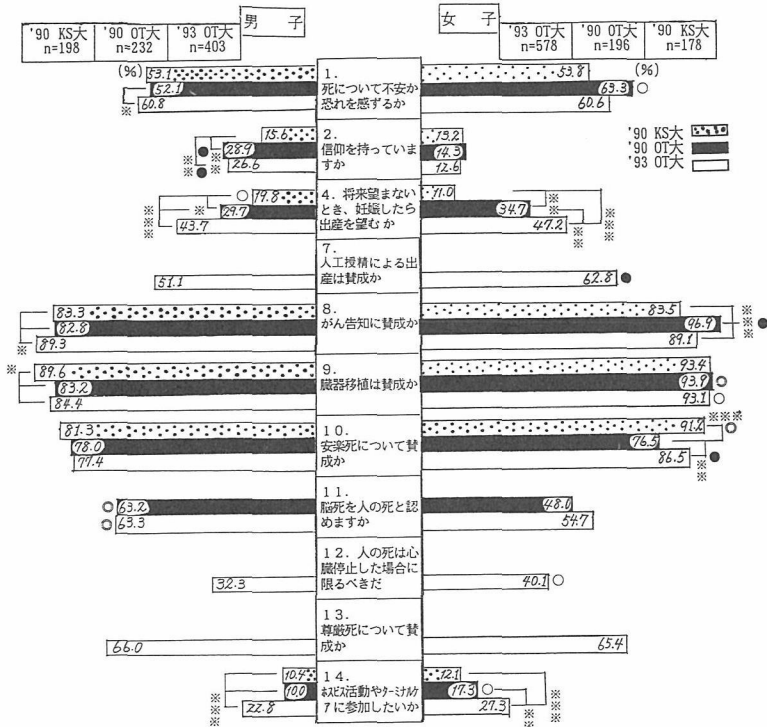


図1 “いのち”に関わる大学生の意識(はい)の比較

※ $P<0.05$ ※※ $P<0.01$ ※※※ $P<0.001$ (男女別大学間の有意差)
○ $P<0.05$ ● $P<0.01$ ●● $P<0.001$ (同一年次男女間の有意差)

6 (瀬戸)

8. ガン告知に賛成する者は '90年では男子82.8%に対し女子96.9%と14.1%もより肯定的で明らかな有意差 ($P<0.001$) が認められた。'93年になると男女間の様相がやや異なり、男子は89.3%と '90年よりも有意 ($P<0.05$) に増大した。女子89.1%は男子とは逆に '90年よりも著しく有意 ($P<0.001$) に減退したが、男女は同じ水準となった。

9. 臓器移植に賛成する者は '90年では男子83.2%に対し女子93.9%と男子よりも10.7%もより肯定的で、明らかな有意差 ($P<0.01$) がみられた。'93年でも男女それぞれ '90年とほぼ同じ水準で推移し、男子84.4%に対し女子93.1%で男子よりも有意 ($P<0.05$) に大であったが、両者極めて肯定的であったことは注目される。

10. 安楽死について賛成する者は '90年では男子78.0%に対し女子も76.5%で、男女共に要望はほぼ同じ水準でかなり高かった。'93年では男子は77.4%で '90年とほとんど同じであった。しかし、女子は86.5%で '90年よりも10%と著しく有意 ($P<0.01$) に増大し、男子とも明らかな有意差 ($P<0.01$) が認められた。

11. 脳死を人の死とする者は '90年では男子63.2%に対し女子48.0%、'93年でも男子はほとんど同じ水準で推移し、63.3%であったが女子は54.7%と前回よりもやや増大していた。しかし、両年次共にいずれも男子が有意 ($P<0.01$) に大であったが、過半数が肯定的であった。

12. 人の死は心臓停止とする者は '93年では男子32.3%に対し女子40.1%で女子が有意 ($P<0.05$) に大であった。

13. 尊厳死に賛成する者は '93年では男子66.0%、女子65.4%とほとんど差はみられなかったが、男女共にいずれも過半数を超えていた。

14. ホスピス活動に参加したい者は '90年では男子10.0%に対し女子17.3%で女子が有意 ($P<0.05$) に大であった。'93年では男子22.8%と '90年の2倍以上に増大し顕著な有意差 ($P<0.001$) がみられた。女子も27.3%と '90年よりも10%と有意 ($P<0.01$) に増大した。

図2についてみると、3-1~3は「現世をどうみるか(楽園・苦海・その間)」を3問から一つとした。全体的にみると、最も高かったのは「3-3. 楽園と苦海の間」とする者が過半数を超え、男子50.9~63.0%、女子67.4~72.8%で男子よりも平均で13%高かった。これを詳しく詳細に年次間でみると、男子では '90年・63.0>'93年・50.9% ($P<0.01$) と有意差がみられた。

女子は男子とは逆に '90年・67.4% < '93年・72.8% ($P < 0.01$) で '93年が有意に大であった。しかも, '93年の男女間では男50.9% < 女72.8% ($P < 0.001$) と女子が著しく大であったことは特徴的である。

しかし, 3-1. 楽園とする者及び 3-2. 苦海とする者は少なく, 男・女それぞれにはほぼ同じ傾向で, 男子は20%前半, 女子は10%代であった。楽園と苦海の肯定率についてみると, 男女間では '90年は両者ほぼ同じ傾向であったが, '93年になるとやや様相が異なり, 男子は楽園で '90年・15.9% < '93年・23.3% ($P < 0.05$) と '93年が有意に増大し, 苦海でも増大 (25.1%) はしたが有意差はみられなかった。女子は男子とは逆に, 楽園では年次間 (14%代) にほとんど差がみられなかったが, 苦海では '90年・18.3% > '93年・11.2% ($P < 0.05$) と '93年が有意に減少した。なお, 楽園

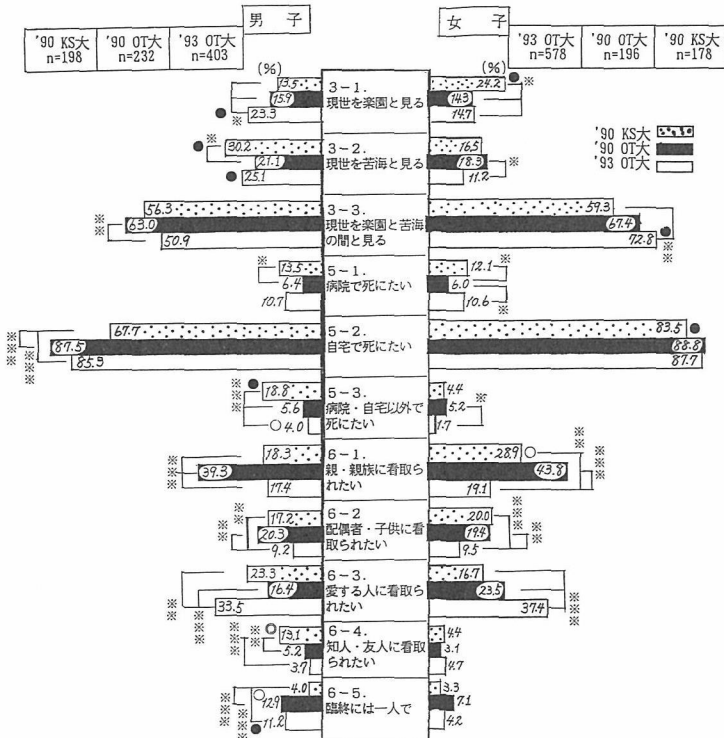


図2 “いのち”に関わる大学生の意識(はい)の比較

※ $P < 0.05$ ※※ $P < 0.01$ ※※※ $P < 0.001$ (男女別大学間の有意差)
 ○ $P < 0.05$ ● $P < 0.01$ ●● $P < 0.001$ (同一年次男女間の有意差)

及び苦海共に '93年では男子が女子よりも有意 ($P<0.001$) に高かった。

5-1～3は「死を迎えたい場所(病院・自宅・それ以外)」について3問から一つとした。全体的にみると、最も高かったのは「5-2. 自宅で死にたい」が男女共に85～89%であった。「5-1. 病院で死にたい」は男女ほとんど同じで'90年の6%から'93年では11%弱とやや増加傾向であったとはいえ、10人に1人と僅かであった。

6-1～5は「臨終には誰れに看取られたいか」であるが選択肢は一つとした。なお、図中には「その他・無回答」は省略したが、'90年は男女各約5%、'93年では男女各約26%であった。全体的には6-1～3「親・親族、配偶者・子供、愛する人」では男女共に'90年と'93年の年次間にはかなり様相が異なっていたが、6-4, 5の「知人・友人及び一人で」は年次間に格別な違いはみられなかった。

項目別にみると「6-1. 親・親族」では'90年では男子39.3%と女子43.8%であったが、'93年になると男女共に半数以下となって男子17.4%と女子19.1%に激減し、両者いずれも有意水準0.1%で有意差がみられた。「6-2. 配偶者・子供」でも「親・親族」と同様に'90年では男子20.3%と女子19.4%であったが、'93年では男子9.2%と女子9.5%に半減し、有意水準1%で有意差がみられた。しかし、「6-3. 愛する人」では'90年は男子20.3%と女子19.4%であったが、'93年になると男子33.5%と女子37.4%で男女共に概ね2倍に増大し、いずれも年次間('90年<'93年)に顕著な有意差 ($P<0.001$) がみられ、先述の「親・親族及び配偶者・子供」とは逆の様相を示した。「6-4. 知人・友人」では男子は'90年・5.2%が'93年・3.7%とやや減少傾向であったが、女子は'90年・3.1%が'93年・4.7%と男子とは逆にやや増加傾向を示したもののほとんど格差はみられなかった。「6-5. 一人で」では年次別の男女間に有意差がみられ、'90年の男子12.9%に対し女子7.1% ($P<0.05$) であり、'93年では男子11.2%に対し女子4.2% ($P<0.001$) でいずれも男子が有意に大であった。なお、年次間では男女共に'90年よりも'93年が僅少ではあるがやや減少傾向であった。

2) KSの男女間の比較

図1についてみると、1. 死について不安を感じる者は男子53.1%と女子53.8%で男女共に同じ水準で過半数が不安感を持っていた。

2. 信仰を持っている者は男子15.6%に対し女子13.2%でやや低い傾向で

あった。

4. 将来望まない妊娠でも出産する者は男子19.8%に対し女子11.0%と男女共に低率傾向であるが、男子が有意 ($P < 0.05$) に大であったことは注目される。

8. ガン告知に賛成する者は男子83.3%、女子83.5%と両者共に高い水準で肯定的であった。

9. 臓器移植に賛成する者も男子89.4%と女子93.4%で両者共に先のガン告知以上に、極めて高い水準で要望している。

10. 安楽死について賛成する者は男子81.3%に対し女子91.2%と両者共に高い水準で要望している中で、さらに、女子は男子よりも約10%高く有意 ($P < 0.01$) に大であった。

14. ホスピス活動に参加したい者は男子10.4%に対し女子12.1%と僅少ではあるが女子に参加したいとする者がやや高い傾向であった。

図2についてみると、3-1～3の「現世を（楽園・苦海・その間）どうみるか」では最も高かったのは「楽園と苦海の間」で、男子56.3%に対し女子59.3%とやや高い傾向ながら男女共に過半数を超えていた。次いで、「苦海」であったが男子30.2%に対し女子16.5%で、男子がほぼ2倍弱と有意 ($P < 0.001$) に高かった。しかし、「楽園」とみる者は男子13.5%に対し女子24.2%で、先の苦海とは逆に女子が有意 ($P < 0.001$) に大であった。

5-1～3の「死を迎えたい場所（病院・自宅・それ以外）」では最も高かったのは「自宅」で男子67.7%に対し女子83.5%と約16%も高く顕著な有意差 ($P < 0.001$) がみられた。「病院」では男子13.5%と女子12.1%で男女ほとんど同じであった。「病院・自宅以外」では男子18.8%に対し女子4.4%で男子が約15%も高く顕著な有意差 ($P < 0.001$) がみられたことは特徴的であった。

6-1～5の「臨終には誰に看取られたいか」では全体的にみると、6-1～3の「親・親族・配偶者・子供、愛する人」の3項目に男女共に概ね20～30%の範囲で均等的な分散傾向がみられた。男女間でみると「6-5. 一人で」の男子4.0%と女子3.3%を除いて、項目毎に男子、女子それぞれにやや特有性が窺えた。「親・親族」では男子18.3%に対して女子28.9%と女子が有意 ($P < 0.05$) に大で、「配偶者・子供」でも男子17.2% < 女子20.0%と女子がやや高かった。しかし、「愛する人」では男子23.2% > 女子16.7%

($P < 0.1$) と男子がやや有意に大で、「知人・友人」でも男子13.1%に対し女子4.4%で男子が明らかに有意 ($P < 0.01$) に大であった。

2. 「はい」の回答項目間の関連性

'90年 OT 大及び '90年 KS 大の14項目の中の①死の不安、②信仰、③楽園、④妊娠、⑧がん告知、⑨臓器移植、⑩安楽死、⑭ホスピス活動の8項目について、数量化Ⅲ類による主成分分析を試みて、「はい」の回答項目の二次元布置から項目間の関連性をみた(図3～5)。

数量化Ⅲ類による主成分分析は項目間の関連性から、類推的に意味解釈するが基本的にはF1軸(横軸)に近く寄っている項目は量的内容としての関連性が強く(例えば、①項目と②項目間の同時回答率から類推する)、F2軸(縦軸)に近く寄っている項目は質的・種類的内容としての関連性が強いとされている。

F1軸の量的関連性の解釈可能な目安として、項目間の同時回答率を10%以上とした。

F2軸の質的・種類的内容の解釈可能な目安として、軸との接近性と共に項目間の量的関連性が10%以下とした。

意味解釈から類推される内容の因子名として、A. 人生観因子は①死の不安②信仰③楽園⑭ホスピス。B. 生命倫理因子は④妊娠⑧がん告知⑨臓器移

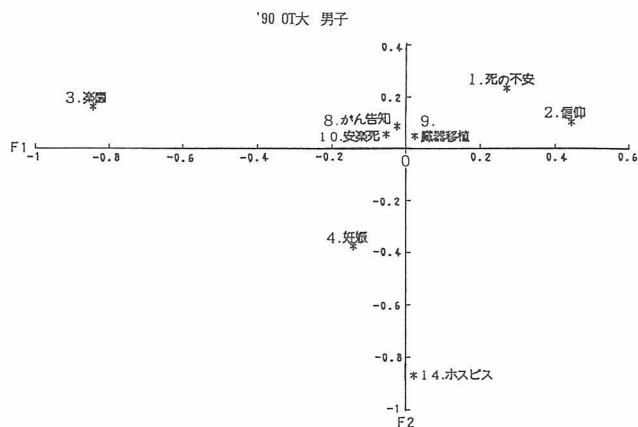


図3 '90 OT 大男子 “はい” の項目間の二次元布置による関連性

植⑩安楽死。C. AとBの総合的な関連性を死生観因子とした。

1) OT 大の項目間の関連性

図3の男子についてみると、F1軸で項目間の同時回答率が最も高かったものは⑧がん、⑨臓器、⑩安楽死の3項目間で61～64%であった。次いで、①死の不安とは先の⑧⑨⑩の各項目との間で39～43%の関連性。さらに、②信仰及び④妊娠とも同じく⑧⑨⑩の各項目との間で22～25%であった。なお、10%代とやや低率となるが①死の不安と②信仰とでは16%、③楽園と⑧⑨⑩の各項目との間で14～15%などであった。以上のように⑭ホスピスを除いた7項目間に総合的な交絡性がみられたことから、これは死生観因子といえよう。F2軸では⑭ホスピスと④妊娠⑧がん⑨臓器⑩安楽死の各項目とでは量的関連性は10%以下で低く、しかも、F2軸への接近性が強かったことから、これは生命倫理因子といえよう。

図4の女子についてみると、F1軸で項目間の同時回答率が最も高かったのは男子と同様に、⑧がん⑨臓器⑩安楽死の3項目間で56～60%であった。次いで、①死の不安と⑧⑨⑩の各項目との間で40～47%の関連性。さらに、①死の不安と④妊娠の22%及び④妊娠と⑧⑨⑩の18～22%等。そして②信仰と⑧⑨⑩、③楽園と⑧⑨、⑭ホスピスと①⑧⑨等で10～13%であった。この全項目との交絡性からこれは死生観因子といえよう。F2軸では①死の不安②信仰③楽園の各項目とも接近性は明解で強かった。しかも、量的関連性も

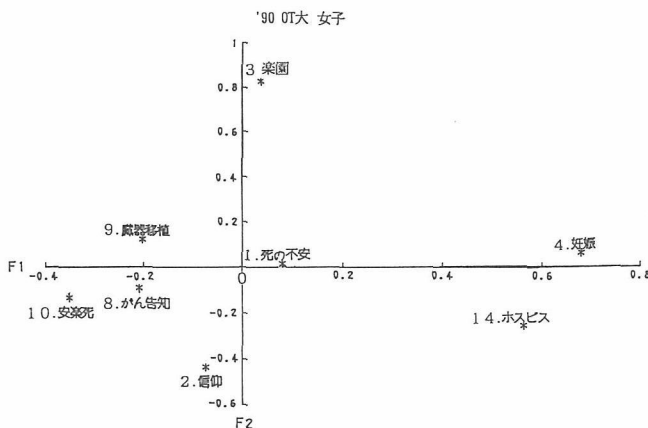


図4 '90 OT 大女子 “はい” の項目間の二次元布置による関連性

10%以下で低かったことから、人生観因子といえよう。

2) KS 大の項目間の関連性

図5の男子についてみると、F1軸で項目間の同時回答率が最も高かったのはOT大の男女と同様に、⑧がん⑨臓器⑩安楽死の3項目間で59～70%とかなり高く、次いで、①死の不安と⑧⑨⑩の各項目との間でも40～52%であった。しかし、高い関連性を示したのはこの4項目で、20～30%代がなく、③楽園と①⑧⑨の各項目との間では10～12%で項目数も少なかった。なお、このF1軸の項目は生命倫理因子といえよう。F2軸への接近性の強い項目は第1象限のプラス位の①死の不安と③楽園及び第3象限のやや大きなマイナス位の④妊娠であったが、この3項目間の量的関連性は低かった。なお、第3象限の大きなマイナス位の⑭ホスピス及び第4象限の大きなマイナス位の②信仰はF2軸から離れ過ぎてはいたが、先の3項目との量的関連性では低かったことから、これは人生観因子といえよう。しかし、OT大男・女及びKS大女子の3グループとは様相が異なり特有性を示していた。

図6の女子についてみると、F1軸では項目間の同時回答率が最も高かったのは先の3グループ同様に、⑧がん⑨臓器⑩安楽死の3項目間で61～69%と高い交絡性を示した。次いで、①死の不安と⑧⑨⑩との項目間で38～45%であった。さらに、④妊娠と⑧⑨との項目間で21%等。そして②信仰及び③

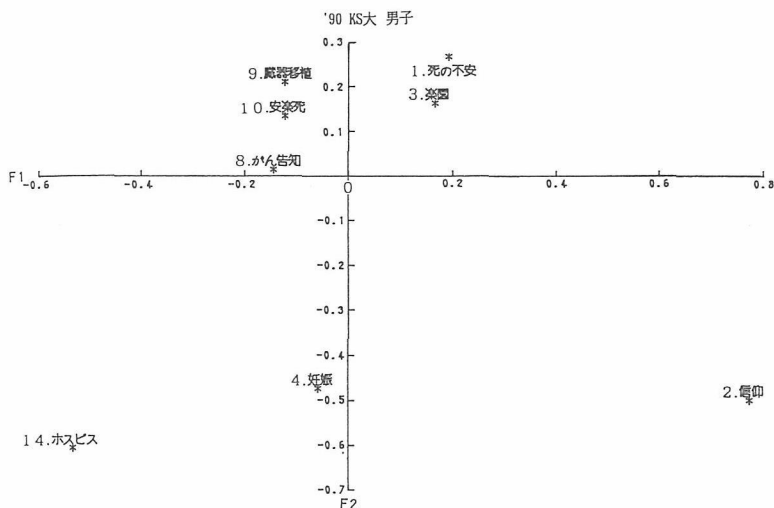


図5 '90 KS 大男子 “はい” の項目間の二次元布置による関連性

楽園と⑧⑨⑩, ④妊娠と①⑩, ⑭ホスピスと①⑧⑨⑩などとの項目間で10～18%であった。以上のことはOT大女子とも類同し、全項目との交絡がみられたことから死生観因子といえよう。

F2軸では軸への接近性に優れていて、しかも、量的関連性では低かった項目は、接近性で最も優れ、第1象限のプラス位の③楽園と同じ象限で軸からはやや離れ気味の①死の不安及び第3象限でマイナス位が大きく、軸からもやや離れ気味の②信仰の3項目であったことから、これは人生観因子といえよう。

3. 生命に関わる事柄を知った時期と情報源

いのちに関わる意識項目1～14番の14項目(図1, 2)のうち7～14番(図1)について、1. 人工授精による出産, 2. がん告知, 3. 臓器移植, 4. 安楽死, 5. 脳死を人の死, 6. 心臓停止を人の死, 7. 尊厳死, 8. ホスピス活動ターミナルケアの1～8番として、「知った時期と情報源」の実態をみたものである。

知った時期については「④小中学⑤高校⑥大学」の3期とした。何によって知ったかの情報源については「⑦授業⑧マスコミ⑨家族⑩友人⑪その他」の5種類とした。なお、知った時期及び情報源共に選択肢は一つとし、複数

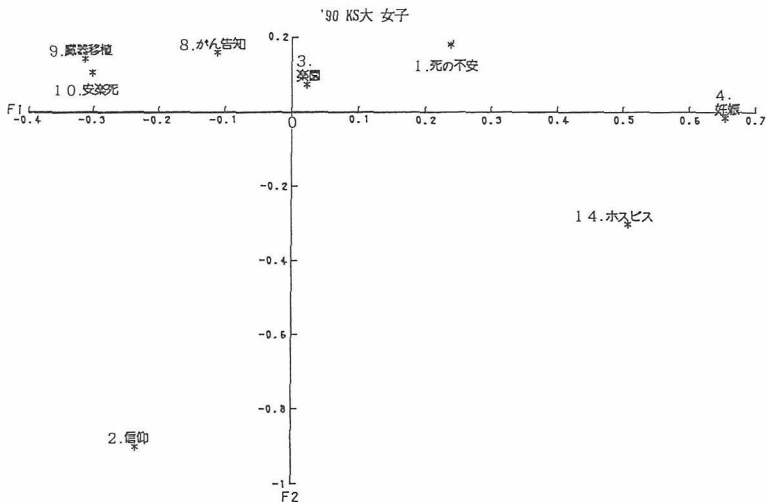


図6 '90 KS 大女子 “はい” の項目間の二次元布置による関連性

回答ではない。資料は '93年 OT 大男・女で、図 7・時期と図 8・情報源の図中の数字は百分比で、有意差は項目毎に男女間とした。

1) いのちに関わる項目を知った時期

図 7 の 3 本のヒストグラムは上から順番に小中学校、高校、大学の順であり、左側が男子、右側が女子である。

図 7 について全体的にみると、小中学校期では女子が全項目で男子よりも関心が高い様相を示し、特に②がん告知は66.2%で、唯一過半数を超えた項目であったことが特徴的である。②がん告知及び⑦尊厳死と⑧ホスピスの3項目を除いた5項目はほぼ3分の1の3人に1人が知っていた。しかも④安楽死(女子やや有意 $P < 0.1$)と⑦尊厳死の2項目を除いた6項目で、有意水準5%以上で女子が有意に大であった。しかし、男子も①人工授精～④安楽死の4項目はほぼ3人に1人が知っていた。

高校期では先の②がん告知の女子を除いて、男女共に全ての項目で他の2時期よりも高く、しかも、②がんの女33.9%⑦尊厳死の男47.9%⑧ホスピス

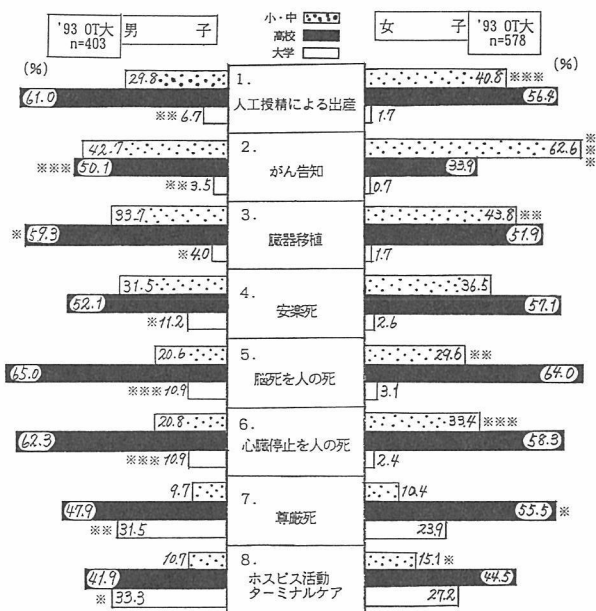


図 7 大学生の“いのち”に関わる事柄をいつ知ったか

注) ①解答の選択肢は1つとした。②その他、無回答は省略した。

※ $P < 0.05$ ※※ $P < 0.01$ ※※※ $P < 0.001$ (男女間の有意差)

の男41.9%と女44.5%の3項目を除いた5項目で男女いずれも過半数を超えていた。なお、⑦尊厳死と⑧ホスピス以外の6項目は高校期迄に概ね90%の者が知っていた。

大学期では⑦尊厳死及び⑧ホスピスが男子32%と33%に対し女子24%と27%で男子が有意($P<0.05$)に大であった。この2項目は小中学校期では10人に1人程度と少なく、高校期迄になると過半数の者が知り、大学期になってからではほぼ3人に1人が知ったことになる。

項目別に男女間についてみると、小中学校期の女子は特に①人工授精40.8%③臓器移植43.8%④安楽死36.5%などに関心が高く注目された。

高校期では男子が約60%代で女子よりも高い項目は①人工授精61.0%③臓器移植59.3%で有意差($P<0.05$)もみられ、④安楽死65.0%(女子も64%でほとんど同じ水準)、⑥心臓停止を人の死62.3%の4項目であった。女子が大な項目は⑦尊厳死55.5%で有意差($P<0.05$)がみられ、⑧ホスピスは44.5%(男子41.9%でほとんど同じ水準)であった。

大学期では全項目で男子が有意に大であったが、類似項目群別に生起率で段階がみられた。①～③では4～7%、④～⑥は11%、⑦～⑧は32～33%の3群となった。

以上のことから女子は小中学校期の生起率がやや高く高校期迄の前傾々向型であるのに対し、男子は小学校期から高校期をピークに大学期までのレンジの広い晩成型といえよう。

2) いのちに関わる項目と情報源

図8の3本のヒストグラムは上から順番に、授業、マスコミ、家族・友人の順であり、左側が男子、右側が女子である。

何によって知ったかの情報源の実態について、図8より全体的にみると、男女共にいずれの項目もマスコミによるが最も多く、項目別男女間の最小値は⑧ホスピスの男58.3%>女52.8%($P<0.1$)の男子だけが女子よりもやや有意に大で、他の7項目は全て女子が高率であった。男子は最小が⑧ホスピスの58.3%から最高が③臓器移植の85.1%の範囲であった。女子も最小⑧ホスピス52.8%から最高③臓器移植90.0%であった。しかも、最高値の③臓器移植では女子が男子よりも有意($P<0.05$)に大であったが⑧ホスピスを除いた他の6項目には男女間に有意差は認められなかった。

授業、家族・友人ではほとんどが同じ様相で5%前後が大部分であったが、

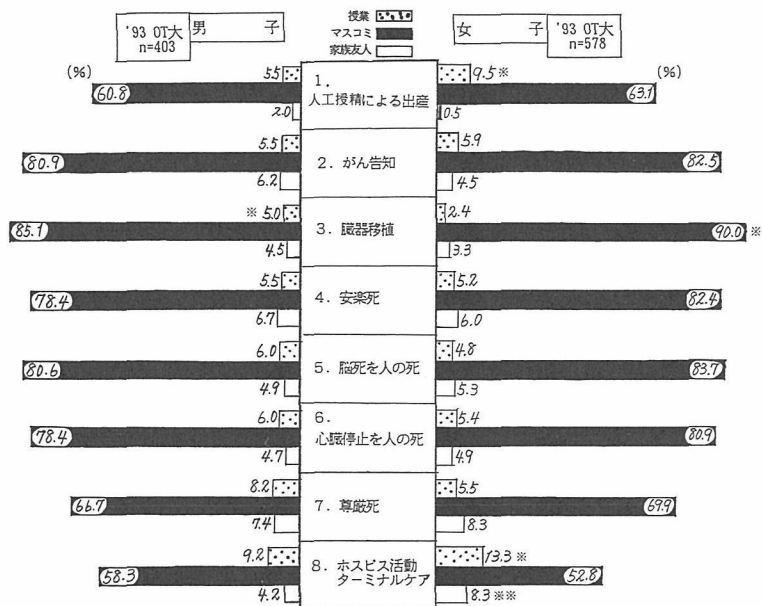


図8 大学生の“いのち”に関わる事柄を何によって知ったか

注) ①解答の選択肢は1つとした。②その他、無回答は省略した。
 ※P<0.05 ※※P<0.01 ※※※P<0.001 (男女間の有意差)

その中で③臓器移植が授業で男5.0%>女2.4% (P<0.05) と低い生起率ではあったが男子に有意差が認められた。10%前後の項目についてみると3項目で、①人工授精では授業が男5.5%<女9.5% (P<0.05) で女子に有意差が認められた。しかし⑦尊厳死と⑧ホスピスでは他の項目とやや様相が異なっていた。⑦尊厳死では授業が男8.2%>女5.5% (P<0.1) で男子がやや有意で、家族友人が男7.4%と女8.3%などであった。⑧ホスピスでは授業によるが男9.2%<女13.3% (P<0.05) で、家族友人によるもの男4.2%<女8.3% (P<0.01) で両者共に女子が有意に大であった。

4. オールポートの人生観の比較

オールポートの人生観6項(表1)の中から該当するもの1つを選択させた。2項目づつを3要因に区分し①趣味的と②利根的を現実主義、③理想的と④奉仕的を理想主義、⑤実利的と⑥名聲的を名利主義とした。表中の数字は百分比で、例えば、現実主義ならば①趣味的数値と②利根の数値の合計値

表1 オールポートの人生観の比較(大学生)

(96)

区分	項 目	男 子				女 子				
		OT大			KS大	OT大			KS大	
		' 85	' 90	' 93	' 90	' 85	' 90	' 93	' 90	
		N	286	232	403	198	167	196	578	178
現実主義	趣味	(1) 金や名譽を考えず自分の趣味にあつた暮しをする	○50.0 ※84.7	●61.1 ※85.6	●49.1 ※74.7	35.3 67.1	○54.3 88.0	●63.6 92.6	●55.9 86.0	47.2 88.4
	郷土	(2) その日その日ののんきにクヨクヨしないで暮らす	34.7	24.5	※25.6	31.8	33.7	29.0	30.1	41.2
理想主義	理想	(3) よくないことを押しのけてどこまでも清く暮らす	4.0	3.4	4.7	4.2	○4.3	○4.7	○3.1	3.5
	奉仕	(4) 一身のことを考えずに社会のために捧げて暮らす	6.7	6.3	8.7	7.6	4.3	5.6	4.3	4.7
名利主義	実利	(5) 一生懸命働いて金持ちになる	2.7	2.9	4.0	3.4	0	0.9	1.2	1.2
	名声	(6) まじめに勉強して名声をあげる	4.0	5.7	○7.9	15.4 ※25.3	1.1 7.6	0.9 1.8	4.0 6.6	●7.1 7.1
			4.7	2.4	3.5	9.9	○6.5	0.9	2.6	0

※P<0.05 ※※P<0.01 ※※※P<0.001 (要因別年次間の有意差)
 ○P<0.05 ●P<0.01 ●P<0.001 (同一要因内項目間の有意差)

である。

1) OT大の男女の年次的推移

表1より要因別を全体的にみると、男女共に最も多かったのは現実主義で、男子では75～86%，女子は86～93%で男子よりいずれの年次も生起率が高かった。理想主義と名利主義は10%以下であった。なお、理想主義と名利主義の同一年次間では女子の'90年の名利主義(1.8)を除いて、男女共に名利主義が理想主義よりも僅少ではあるが生起率が高かった。

要因別に年次推移をみると、男子では現実主義は'85年84.7%が'90年85.6%とやや微増はしたが、'93年になると74.7%と前2者とは約10%も減少して明らかな有意差(P<0.001)がみられた。女子も年次推移では男子と同じ様相で、'85年88.0%が'90年92.6%と微増したが、'93年になると前回よりも6.6%減少して86.0%で'90年と有意差(P<0.01)がみられた。年次別の項目間では男女共に①趣味にあった暮らしをするが②ののんきに暮らすよりも生起率が高く、明らかな有意差(P<0.001)がみられた。

理想主義では男子は'85年6.7%が'90年6.3%と僅少な変動がみられ、'93年には8.7%と微増した。しかし、女子は'85年4.3%が'90年5.6%と微増したが'93年には再び4.3%となって停滞傾向であった。年次別項目間では男女共に③どこまでも清く暮らすが④社会のために捧げて暮らすよりも各年次僅少であるが大であった。年次推移では男子は③理想的④奉仕的に共に漸増傾向で女子とは異なり、女子の③理想的は漸減傾向で④奉仕的に停滞傾向であった。

名利主義では男子は '85年8.7%から '93年11.4%と漸増し、女子は '85年7.6%～'93年6.6%と漸減的であった。項目別年次推移についてみると、⑤実利的・働いて金持になるでは男子は '85年4.0%から '93年7.9%と明らかな漸増傾向を示した。女子も男子よりは低率ではあったが '85年1.1%から '93年4.0%とほぼ同じ様相であった。⑥名声的・勉強して名声をあげるでは先の⑤実利的とは逆の様相で、男子は '85年4.7%から '93年3.5%、女子は '85年6.5%から '93年2.6%と漸減傾向を示した。なお、年次別項目間では男子は '93年の⑤実利7.9% > ⑥名声3.5% ($P < 0.01$) 逆に女子は '85年の⑤実利1.1% < ⑥名声6.5% ($P < 0.01$) に有意差がみられた。'90年以降男女共に⑤実利的・金持になろうとする志向性が窺え、逆に、⑥名声的・真面目に勉強して名声をあげるに減退傾向がみられるようになった。

2) '90年 KS 大男女の年次的比較

表1より全体的にみると、3要因の中で現実主義が男女共に OT 大男様に最も多かった。

KS 大男子の67.1%は KS 大女子88.4%及び OT 大男女のいずれの年次とも明らかな有意差 ($P < 0.001$) がみられた。しかし、項目間の①趣味的・趣味に合った暮らしをすると②利他的・のん気に暮らすの関係では男子は①35.3% > ②31.8%、女子も①47.2% > ②41.2%で、男女共に①趣味的に暮らすが生起率は高かったが有意差は認められなかった。なお、OT 大男女でも項目間の様相は同じであったが、各年次共に①趣味的が有意に大であった。

次いで、名利主義では KS 大男子25.3%と女子7.1%は共に OT 大男女の全ての年次に対して有意 ($P < 0.01$) に大であった。項目間でも⑤実利的・一生懸命働いて金持になるにより強く反映されて、男子15.4%は先の名利主義と同様に OT 大男女の全年次に対して有意に大であった。なお、⑥名声をあげるの男子9.9%も '85年 OT 大女子6.5%を除いて⑤実利的と同様有意に大であった。

さらに、理想主義が3要因の中で生起率が最も低く、男子7.6%と女子4.7%は OT 大男女全年次間と殆ど同じ水準であった。項目別でも③理想的・どこまでも清く暮らす(男4.2%、女3.5%)及び④奉仕的・社会のために捧げて暮らす(男3.4%、女1.2%)でも、OT 大男女も全年次5%以下で殆ど同じ様相であった。

Ⅳ 考 察

1. 死について不安・恐れでは '90年はKS大男女及びOT大男子では52～54%と殆ど同じ様相であったが、'93年OT大男子は60.8%と有意($P < 0.05$)に増大した。しかし、OT大女子は'90年63.3%で先の3者とは約10%も高かったが、'93年になるとやや減退して'93OT大男子とほぼ同じとなった。なお、'93OT大男子の増大についてみると、「今の暮らしは楽しいですか」では'93OT大女子の90.7%に対し男子82.3% ($P < 0.05$)と有意に低く、「今の暮らしは寂しいですか」では逆に、男29.5%⁽²²⁾>女22.3% ($P < 0.05$)で有意に男子が高かったことから、'93年では男女ほぼ同じ水準は頷ける。

2. 信仰をもっているでは一般系大学のKS大男女及び宗門立系OT大女子は13～17%であったが、京都市内短大女子や地方都市短大女子でも14～16%で殆ど同じであった。しかし、宗門立系OT大男子では27～29%で先の3者とは明らかな有意差がみられた。なお、石井(国学院大)は朝日新聞社が行った「宗教についての全国世論調査(有権者)」⁽²⁴⁾の解説の中で、前回の'81年の14年前は36%から'95年32%へと減少しているとし、昭和20年代は5割を超えていたが、昭和30年以降次第に低下して、現在は何の調査でも、ほぼ30%前後と指摘している。さらに、日本人の信仰に深く関わる神棚と仏壇の所有率について大都市で'81年50%が'95年40.5%と顕著に減少している。宗門立系'93OT大では男子65.3%、女子71.5%で、京都市内短大女子77.2%と高校男子72.5%であった。これはOT大男子で有権者10万人未満の市と他の3者は町村と類同していた。

4. 望まない妊娠でも出産するでは、宗門立系'90OT大男(30%)女(35%)は一般系'90KS大男(20%)女(11%)とは有意差がみられた。しかも、OT大男女は'90年の大学カリキュラム大綱化前と'93年の大綱化後では格差が増大し、男子44%及び女子47%で顕著な増大($P < 0.001$)がみられた。これは京都市内短大女子は48.5%で'93OT大女子とほぼ同じであったが、地方短大女子では28.4%で顕著な差($P < 0.001$)で地域差がみられた。数量化Ⅲ類の主成分分析から項目間の量的関連性を男子についてみると、'90OT大(図3)の4.妊娠に対して1.死の不安は12.1%、14.ホスピス10.1%であったが、'90KS大(図5)は4.妊娠に対して1.死の不安

6.1%, 14. ホスピス3.0%で2分の1から3分の1と低かった。

7. 人工授精による出産では男子は半数の51%に対し女子63%で有意に高く、京都市内短大女子64%で類同し、人工授精でも出産したいとする願望は女子に強い。先駆的な不妊治療で知られるマザー産婦人科(北九州市)で、顕微授精法の一つで、卵細胞に精子一個を注入する「卵細胞質内精子注入法」を使って、精液中の精子が11個と極端に少ない男性の精子での授精、出産に成功し4月下旬に体重3145g男児が生まれ正常に育っているという。同医院ではこのケースを含め、'93年12月から現在までに1162回の同様の授精を行った結果、396回の妊娠に成功した。健康な男性の精液には1cc当り4000万個以上の精子があり、卵1個につき10万個以下の精子だと体外授精は成功しないといわれる。²³ 体外授精も不可能な者にとってこの顕微授精の成功率が34.1%の3分の1強であっても福音に違いない。

8. がん告知に賛成では男女共に'90年83%から'93年には89%と有意に増大傾向がみられ、京都市内短大女子も89%で同じであったが、地方短大女子は65%と有意($P<0.001$)に低く地域差がみられた。

大阪赤十字病院呼吸器外科中山雅治医師の'94年同科外来患者の一般サラリーマン500人のアンケート調査で自分自身がんになったら55%が完全告知、15%が不都合な部分は避ける病名告知と合わせて70%が積極的告知を望んでいた。治る望みがあればの消極的告知は20%であった。年齢が下がるにつれて告知希望が増える傾向があった。家族ががんにかかった場合、完全告知は両親18%、兄弟21%、配偶者30%と自分の場合に比べて半減した。家族ががんになった経験をもつ人のうち、告知したのは21%。告知の結果については、よかったが55%。告知しなかった人の、しなくてよかったは37%であった。と'95年日本癌治療学会で発表している。

9. 臓器移植の賛成では女子はKS大、OT大、市内短大女子も含めて92~94%と殆ど差がなく高かった。男子もKS大は90%と高かったがOT大男子83~84%で生起率は低くはなかったが有意差($P<0.05$)がみられ、宗門立系大学男子の特性か、地方短大女子も81%で類同していた。

我が国では臓器移植法案が'94年4月国会に議員提出された。その間にあって、海外で心臓や肝臓の移植を受ける患者が増えたことから'90年に脳死臨調が発足。'92年に脳死移植を認める内容の答申を出した。その際、臓器移植法の整備を条件にしたため、法整備が議論されるようになった。この法

案は個人の生命観や思想、宗教観にからむ問題であり、これに脳死や移植問題への理解が手伝い、多くの議員たちは賛否の判断をためらって提出から1年半も継続審議中である。⁽²⁷⁾

11. 脳死を人の死ではOT 大男子63%、女子52%で市内短大女子48%であったが、'92年の朝日新聞社世論調査では47%、各種調査でも50%前後としていることから、男子はやや高いが、女子はほぼ同じ傾向であった。なお、山梨医大・脳神経外科によると、身内の脳死を体験したら8割以上が脳死を認めなくなったという。また、厚生省のアンケートで日本救急医学会認定医657人の回答で、医学的判断では76%、患者に接する際の現実的な判断66%、社会的判断では22%に過ぎなかった。⁽²⁸⁾

10. 安楽死に賛成では男子は女子よりもやや低く、KS 大81%を最高にOT 大77~78%であったが、女子はKS 大91%を最高にOT 大77~87%で、市内短大女子も82%、地方短大女子は70%と最も低かった。これを数量化Ⅲ類による主成分分析の項目間の量的関連性(図3~6)からみると、安楽死に対して1. 死の不安はOT 大男女とKS 大男40%、KS 大女38%。8. がん告知とはOT 大は男女共に58%、KS 大男女は59~61%とやや高かった。9. 臓器移植でもOT 大男女は56%であったが、KS 大男70%、女64%とかなり高かった。以上のことから安楽死に対して3項目が高い交絡性を示し、しかも、KS 大男女の安楽死が高い生起率であったことを裏付けている。

13. 尊厳死に賛成ではOT 大男子66%、女子65%で市内短大女子57%、地方短大女子54%とOT 大男女がやや高かったが、安楽死とは明らかな差($P<0.01$)がみられた。これは先の項目間の高い交絡性からも了解されよう。

これらについて藤腹は「仏教と尊厳死・安楽死」の小論の中で「安楽死」が本来ギリシャ語 euthanasia (苦しみのない良き死)を語源としているが、善導大師は『発願文』において「良き死」を説いていることの要旨を挙げて説明している。しかし、安楽死法の成立を希望する人は「患者に死ぬ権利が与えられるべき」と強調するが、死ぬ権利など強調しなくても人は必ず死ぬ。これを柏木氏はサマーセット・モームがいろんな統計の中で、絶対に間違いない統計がある、それは人間の死亡率が100%だということ、⁽³⁰⁾ といっている。川畑氏は日本尊厳死協会などに、リビングウイル(生前の告知)を託した人は既に7万人を超えているという。⁽³¹⁾

14. ホスピス活動では男子が女子よりも低く、'90年の男子はKS 大も OT 大も10%で差がなかった。女子はKS 大12%、OT 大17%であった。項目間の量的関連性からみると、両大学女子はホスピスに対して1. 死の不安⁸。がん告知⁹。臓器移植¹⁰。安楽死の4項目で10~16%の交絡性を示したが、両大学男子は4項目全てで10%以下で交絡性が弱く、生起率の低さを示している。しかし、大学カリキュラム大綱化後 '93年になると OT 大男子は23% ($P<0.001$), と '90年の10人に1人が5人に1人となり、女子は27% ($P<0.01$) となって、概ね5人に1人が3.5人に1人と有意に増大したことが特徴的である。

田宮によれば、末期医療、ターミナルケア、ホスピスケア、仏教ホスピスなどの言葉もマスコミを中心に使われたり、話題になり始めたのが '70年代である。'80年代半ばに末期医療への仏教の再参加が始まり、田宮は '85年に「ビハール」は仏教ホスピスに替わる言葉として提唱している。⁶²

ターミナル (terminal) という語は「終りの、末期の」という訳語がある。本来的にはラテン語のテルミヌス (terminus) から来ている。これは境界という意味である。ターミナルケアを文字通り訳せば境界のケアである。境界のケアでは日本語としてなじまない⁶³ので、末期ケア、終末期のケア、ターミナルケアとして用いている。

5. 死を迎えたい場所では自宅が最も多く、KS 大男子68%を除いてKS 大女、OT 大男女いずれも84~89%であった。病院はKS 大がやや高く10%を超えていたが、OT 大は男女共に10%以下であった。KS 大男子で病院・自宅以外が20%弱あったことは注目される。

'47 (昭22) 年の統計によると、家庭死は全体の90.8%を占めていた。しかし、第2次世界大戦後、医学・医療の発達と共に病院数も増え、人の死に場所が家庭から病院へと移った。'91年現在、病院で死を迎える人は全体の70%となり、日本人の死因の第1位であるがんの場合は病院死が90%占めている。⁶⁴

日本で家庭死を困難にしている原因の1位は家族側が最後まできちんと治療を受けさせたい^{35.6%}、②緊急時の不安③住居の狭さ④看護する人手が整わない等。若し多くの人々が家庭を望んでいるのなら、その実現のためにシステムづくりをする必要があろう。^{63/64}

柏木氏はアメリカでは末期がん患者でも家庭で苦痛のコントロールができ

る援助医療システムがあり、自宅療養、苦痛なしに自宅で臨終を迎えられる⁸⁰としている。

6. 臨終には誰れに看取られたいかでは6-1 親・親族と6-2 配偶者・子供を合わせて「親・家族」としてみると、'90 KS 大男子36%，女子49%に対し'90 OT 大男子60%，女子63%で男女共に両大学の特有性がみられた。KS 大男子の差は愛する人と知人・友人にほぼ均等に分散していたが、女子はそれが不明瞭であった。'93年になると OT 大の親・家族は男子27%，女子29%と半減したが、愛する人は男子34%，女子37%と有意 ($P < 0.05$) に逆転した。これは旧課程と新課程の年代的、学生気質の特有性といえようか。

V ま と め

いのちに関わる意識（はい）の比較では、

- 1) 死について不安では男子52～61%，女子54～63%で過半数が感じているが、現世を楽園と苦海の間とほぼ同じ様相である。
- 2) 信仰をもっているでは宗門立系'90 OT 大男子29%が最も多く、一般系大男女と OT 大女子は13～16%と低く、社会的には3人に1人といわれている。
- 3) 望まない妊娠でも出産するでは'90 OT 大男子30%，女子35%で一般系大男女の2～3倍であり、大綱化以後の新課程'93年になると44～47%とより有意に増大する。
- 4) 死を迎える場所では病院死10%前後で家庭死85%前後と高いが、一般系大男20%が病院・自宅以外でが注目される。'91年統計では病院死70%，がんの病院死90%を占める。
- 5) 臨終の看取りでは'90年は親・家族が最も多く、宗門立系大男女は60%以上で過半数を超え、一般系大男女36～49%と顕著な差で宗門立系大の特有性がみられる。
- 5) 臨終の看取の OT 大の年次間では'93年になると愛する人が1位で男34%と倍増、女37%と6割増で新課程に特有性がみられる。
- 6) 安楽死を要望する80～90%の'90年全男女は死の不安を40%が感じ、がん告知59%が賛成、臓器移植61%が賛成している。
- 7) ホスピス活動では'90年両大学男女は10人に1人であったが、'93 OT 大男23%に倍増、女27%の6割増と新課程が特徴的である。

8) いのちに関わる事柄を知った時期の最も早かったのは女子小中学校期で全項目男子よりも高く⑦尊厳死⑧ホスピスを除いて3人に1人が知り②がん告知は63%の過半数を超え注目される。

9) ⑦尊厳死と⑧ホスピスは小中学校期10%代, 高校期50%, 大学期30%と3区分され, 他6項目は高校期迄で90%以上が知っている。

10) 情報源では全項目マスコミが53~90%で著しく高率で⑧ホスピスの男子58%以外は全て女子が70~90%で1位である。

11) オールポートの人生観を年次推移からみると最高が現実主義で'90年宗門立系大86~93%。'93年には漸減して最高女子86% > 男子75% ($P < 0.001$) である。OT 大男女は各年次共に①趣味にあった暮らしが②のん気に暮らすよりも顕著に高く ($P < 0.001$) 宗門立系大学の特有性であろう。

12) 名利主義では逆に一般系大が有意に高く ($P < 0.01$) 男25%, 女7%で⑤金持ちになるでも宗門立系大男女の全年次よりも有意 ($P < 0.05$) に大で一般系大学の特有性であろう。

13) '93 OT 大男女平均から交絡的にみると, 死の不安・61%について, ④社会に捧げて暮らす2.6%は死の不安を感じないが89%と多く, ⑤働いて金持ちになる6.0%は逆に死の不安を感じずが78%と多い。

14) がん告知・89%について, ③清く暮らす3.9%はがん告知賛成34%と少なく, ④社会に捧げて暮らす・2.6%はがん告知賛成82%と多い。

15) 宗教を必要とする・49%について, ②望まない妊娠でも出産する73% > 25%出産をしない ($P < 0.01$) とは明らかな有意差が認められる。

以上を総合してみると, 信仰を持っている者は, 死に不安がなく, 死に場所や臨終の看取られる人にこだわりがなく, ホスピス活動に参加したいとしている。オールポートの人生観6項目全体と「自分の死について考える」等とは関連性は殆どみられない。

なお, 本稿を終えるにあたり資料収集・整理に格別の御協力を戴きました池坊短期大学客員教授大木久和先生並びに御指導, 御校閲を賜りました京都大学名誉教授川畑愛義先生に深甚の謝意を表します。

註 (参考文献)

- (1) 経済企画庁編: 国民生活白書平成6年版, 大蔵省印刷局: 3-14, 1994.
- (2) 柏木哲夫編: ターミナルケア・系統看護学講座, 別巻10, 医学書院: 1, 1995.
- (3) 朝日新聞社: 平均寿命また更新, 朝日新聞朝刊, 7月3日(月)付: 1, 1995.

- (4) 朝日新聞社：人間の医学と医療，朝日新聞朝刊，4月6日（木）付：24-25，1995.
- (5) 朝日新聞社：論壇・特集オウム真理教，朝日新聞朝刊，6月2日（金）付：4，1995.
- (6) 射場利春，藤田禄太郎：学校教育における死生観教育の在り方(4)，第40回日本学校保健学会講演集：28，1993.
- (7) 井形昭弘：生と死，学校保健研究，34(2)：57-60，1992.
- (8) 森昭三：健康教育と死の教育，健，23(8)：50-53，1994.
- (9) 栗山千代美：「生命」を考えると、「死」はよき教材となります，健，23(10)：45-46，1995.
- (10) 川畑愛義，瀬戸進他：学徒の栄養摂取の実態とその発育発達に及ぼす貢献度の研究，昭和54～56年度科学研究費補助金（特定研究(1)）研究成果報告書：34-38，1982.
- (11) 奥野直・川畑愛義・瀬戸進ほか：学徒の栄養摂取の実態とその発育発達に及ぼす貢献度の研究，第31回近畿学校保健学会口演予稿集：36，1984.
- (12) 君羅満，吉村磯次郎，川畑義，庄司博延，瀬戸進：学徒の自覚症と食生活の相関に関する研究，学校保健研究，31，SUPPL：277，1989.
- (13) 平野登志子：児童・生徒の生活習慣と不定愁訴に関する研究，華頂短期大学研究紀要，37：151-181，1992.
- (14) 瀬戸進：学徒における心身の愁訴の問題，大谷学報，65-(2)：1-20，1985.
- (15) 瀬戸進：大学生の不定愁訴の日内変動に関する研究，大谷学報，69(4)：1-24，1990.
- (16) 瀬戸進，川畑愛義，吉村磯次郎，庄司博延他：女子学生の不定愁訴の変動性に関する研究，学校保健研究，31，SUPPL：278，1989.
- (17) 栗山千代美，川畑愛義，瀬戸進，吉村磯次郎：小学校児童の生死等に関する意識についての研究，第39回近畿学校保健学会，予稿集：37，1992.
- (18) 栗山千代美，川畑愛義，瀬戸進他：児童・生徒の生死等に関する意識についての研究，学校保健研究，34，SUPPL：334，1992.
- (19) 瀬戸進，川畑愛義，平野登志子他：大学生の生命観に関する研究，第38回近畿学校保健学会，予稿集：11，1991.
- (20) 門田美千代，中村寛志，川畑愛義，瀬戸進：大学生の「生と死に関する」意識調査，第40回日本学校保健学会，講演集：344，1993.
- (21) 瀬戸進：今，子どもたちの心の中で揺れ動く死の影と実像，月刊住職，28：54-59，1993.
- (22) 栗山千代美，川畑愛義，瀬戸進，門田美千代，大木久知：高校生のいのちに関わる意識に関する研究，第40回近畿学校保健学会，講演予稿集：40，1993.
- (23) 門田美千代，中村寛志：短期大学生女子学生の人生観に関する意識調査，瀬戸

内短期大学紀要, 23: 61-66, 1993.

- ②4 石井研士: 宗教についての全国世論調査, 朝日新聞朝刊, 9月23日(土)付: 10-11, 1995.
- ②5 朝日新聞社: 精子11個で授精に成功, 朝日新聞朝刊, 5月2日(火)付: 3, 1995.
- ②6 朝日新聞社: がん告知・本人の55%, 完全望む, 朝日新聞夕刊, 9月21日(水)付: 1995.
- ②7 朝日新聞社: 延びる「生命の限界」幅広く慎重な検討を, 朝日新聞朝刊, 7月21日(金)付: 1995.
- ②8 朝日新聞社: 脳死は社会的にも人の死, 朝日新聞朝刊, 7月16日(日)付: 3, 1995.
- ②9 藤腹明子: 仏教と尊厳死・安楽死, 大法輪, 12: 135, 1995.
- ③0 川畑愛義, 柏木哲夫: 対談・誕生日には死について考えよう, 健康な子ども, 247: 28-31, 1993.
- ③1 川畑愛義: 巻頭言・安楽死をどう考えるか, 健康な子ども, 272: 1995.
- ③2 田宮仁: 末期医療への仏教の参加, 大法輪, 12: 128-133, 1995.
- ③3 柏木哲夫編: ターミナルケア・系統看護学講座, 別巻10, 医学書院: 4-5, 1995.
- ③4 柏木哲夫編: ターミナルケア・系統看護学講座, 別巻10, 医学書院: 2, 1995.
(本学教授, 発達運動学)